

令和2年度第1回福岡市文化財保存活用地域計画策定協議会 議事要旨

■日 時：令和2年12月23日（水）10:00～12:00

■会 場：福岡市赤煉瓦文化館 会議室3

■出席者：

【委員】有馬学（会長）、佐伯弘次（副会長）、石蔵利憲、徳永美紗、西村真規子、
山下永子

【オブザーバー】杉原敏之（福岡県）

【事務局】吉田宏幸、田代和則、松本真人、比佐陽一郎、本山美和子、山下久美子

議事1. 会長、副会長の選任

・会長は要綱第5条の規定に基づき委員の意見を聞いたが、自薦、他薦が無かったことから事務局案により有馬委員が推薦され、承認された。

・副会長は要綱第5条2の規定により、有馬会長から佐伯委員が指名され、承認された。

議事2. 福岡市文化財保存活用地域計画（案）について

≪質疑・意見≫

●『福岡市の文化財の保存活用に関する基本方針（福岡市歴史文化基本構想）』について

委員：福岡市は2000年都市だけど感じられないことが課題である。この構想の特徴は、文化財を守っていく手法が従来の指定しかなかったが、指定以外の文化財も大事だということを意識した計画であること。「知る」「守る」「活かす」といった言葉で市民に分かりやすいように留意していること。文化財の保存活用の目的を「都市の魅力」と「都市の活力」の向上に寄与するものだと言い切っていることが挙げられる。

●福岡市の歴史文化について

委員：数年前から福岡市は2000年都市であると言うようにしている。比較的コンパクトな福岡平野において、途絶えることなく都市的な営みが続いてきたということを市民の皆様にも認識してもらいたいと思っている。

委員：福岡市は、膨大な量の遺物を収蔵しているが、将来的にも収蔵し続ける必要があるのか。

→事務局：保護を目的に発掘を行っており、原則的には保存である。但し、現在収蔵物が問題になってはいないが、将来的には必要な議論である。

→委員：将来的に研究技術が進み、今まで無価値に思っていたものが重要な遺物だったというケースもあるため処分することは難しい。

委員：なぜ福岡は2000年もの歴史があるのに京都のようなまちにならなかったのか。

→委員：個人的な見解だが福岡は上書き都市だと考えている。上書きを繰り返すことで発展してきたという側面もある。また、あまり過去にとらわれない気質があるのかもしれない。埋蔵文化財の場合、調査しても埋め戻すため目に見えないという難

しがある。

委員：歴史文化と言われても多くの市民には実感がないものだろう。近年では国際的にも福岡は「住みやすい」ということが知られている。例えば古墳などがあった場所は住みやすかったから古墳が置かれたとも言える。住みやすさを切り口に市民が少し立ち止まってその理由を考えられるとよいのではないか。

委員：福岡は他都市に比べ若い流入者が多い。市民というと昔から住んでいる人をイメージしてしまうが、引っ越してきた若者も視野に入れた発想が必要だと感じている。

●県との関係について

委員：福岡県との関係は？

→福岡県：県は大綱を策定している。大綱はあくまでも県全体としての指針であり、ある程度整合が図られていれば良いと考えている。市町村が個別に策定する地域計画のほうが、その地域にとっては重要である。

●計画の検討体制について

委員：ワーキンググループで計画の原案を検討するのか。

→事務局：ワーキンググループは各担当者と現場レベルの協議を行う場である。計画の原案は、事務局で作成し、本協議会で検討していきたいと考えている。

●指定以外の文化財の守り方、活かし方について

委員：多くの市民は指定や登録の区別がついていない。文化財の情報が市民に届いていない。今回の計画で登録の場合の補助を手厚くしていくような考えはあるのか。

→事務局：財源の問題もあるため、例えばクラウドファンディングの活用など従来のやり方とは異なる幅広い手法を考えていきたい。

委員：太宰府市は市民遺産という制度をもっており、指定文化財以外の市民が大事だと思ふものを認定している。市民の方が行政の枠組みに先んじていると言える。

委員：災害時の文化財レスキューの現場において、指定文化財以外の文化財の取扱についてのノウハウが蓄積されてきているので活かせることがあるかもしれない。

委員：熊本城の天守閣や首里城は復元された建物であり学術的には重要ではないものの、市民の心の支えになっているとも言える。学術的な視点だけではない文化財の捉え方の一例であり、専門家も考え方のアップデートが必要だと感じている。

→事務局：文化財を指定して守るだけでなく、まつりを支える地域を支えるように、地域総がかりで文化財を守り、活かしていく流れで考えてきたい。

●データベースについて

委員：指定文化財以外の文化財がどこにどれだけあるのかを把握しておく必要がある。過去の悉皆調査の報告書をデータベース化するなど、調査成果を統合化する必要があるのではないか。

→委員：データベースは横断的な検索ができてオープンであることが重要である。しかし、個々の部署が異なるフォーマットで調査を行っているため整理するのは現実的に難しい。これから行う調査はあらかじめ将来的なデータベース化を見据えて行う必要があるだろう。

委員：以前、総合的把握の調査を福岡市でも行われていたと思うが、報告書等はあるのか？

→事務局：外への報告書はない。データベースはある。

→委員：基礎的作業を総合化する必要がある。

→事務局：内部でも話題にはなっている。

→委員：横ぐしで検索できるようにできるようにする必要があるが、統一したフォーマットでないと使えない。

●文化財の利活用について（ユニークベニュー等）

委員：福岡市は重要な文化財も多く、アピールポイントが分散しがちである。元寇防塁は国内でもここにしかない史跡だが、大型バスを停める場所がないなどアクセスが悪い。

委員：会議等で福岡を訪れる人たちは、食べ物などに期待しているが、観光は太宰府市などに行ってしまうている。十分な歴史文化があることを伝える仕組みが必要だと感じる。また、ユニークベニューを行う際のハードルが高いため、ワンストップ窓口のようなものがあると良い。

→委員：博物館でもユニークベニューを行っているが、利用希望者から申し入れがあった際に関係部署と協議を行っており調整する仕組みは現在ない。

委員：観光客が福岡ではなく周辺都市に行ってしまうのは必ずしも大問題ではないように感じている。太宰府に行く人も結局は、食事をしたり、宿泊するのは福岡市であり、エリアを広く捉えた考え方も必要ではないか。

委員：ユニークベニューを考えた際にできない場所はどのような理由があるのか。

→事務局：史跡の場合は地下遺構への影響など事前協議が必要になるが、原則的に市の施設は協議を行えば利用することは可能である。

委員：海外では美術館で立食パーティーを行ったりしている。飲食とあわせないと特別感を演出することは難しい。

→委員：海外では、お城や宮殿など元々飲食をすることを前提とした建物を美術館などにしている場合が多いが、日本の場合はそもそも想定していないため難しい点もある。福岡市博物館では演奏会など飲食を伴わないユニークベニューを行っているが、電源の確保が難しいなどの課題がある。ユニークベニュー自体がまだ歴史の浅い取組であり、技術的な課題も含めて詰めていけると良い。

●広域連携について

委員：市域を越えた広域連携などは考えているのか。

→事務局：地域計画自体は市内の文化財について記載するものではあるが、例えば鴻臚館と太宰府などストーリーで繋がっているものであり、連携の必要性は感じている。